

## 2023年度国公立大志願状況

河合塾

2023/2/22

国公立大の確定志願者数が21日に文部科学省から発表された。総志願者数は423,180人、志願倍率は4.3倍であった。以下、発表された国公立大の出願状況について概況をまとめた。

### ■志願者数は前年から減少も国公立大の人気は堅調

国公立大一般選抜の総志願者数は423,180人と前年から約5千5百人減少（前年比99%）、募集人員に対する志願倍率は前年同様の4.3倍となった（以下、倍率は全て志願倍率）。先日公表された大学入学共通テスト（以降、共通テスト）の受験者数前年比97%と比較すれば減少率は低く抑えられており、国公立大の人気は堅調といえる。【表1】。

【表1】国公立大志願状況

区分	日程	募集人員 (A)		志願者数 (B)				志願倍率 (B/A)	
		22年度	23年度	22年度	23年度	前年差	前年比	22年度	23年度
国立大学	前期	63,637	63,648	179,320	176,484	-2,836	98%	2.8	2.8
	後期	12,962	12,679	123,633	121,821	-1,812	99%	9.5	9.6
	計	76,599	76,327	302,953	298,305	-4,648	98%	4.0	3.9
公立大学	前期	16,320	16,584	54,676	54,966	+290	101%	3.4	3.3
	後期	3,367	3,388	39,647	38,246	-1,401	96%	11.8	11.3
	中期	2,349	2,428	31,380	31,663	+283	101%	13.4	13.0
	計	22,036	22,400	125,703	124,875	-828	99%	5.7	5.6
国公立大学計	前期	79,957	80,232	233,996	231,450	-2,546	99%	2.9	2.9
	後期	16,329	16,067	163,280	160,067	-3,213	98%	10.0	10.0
	中期	2,349	2,428	31,380	31,663	283	101%	13.4	13.0
	計	98,635	98,727	428,656	423,180	-5,476	99%	4.3	4.3

※文部科学省資料より

※分離・分割方式ではなく独自日程で実施する大学は上表には含まれない

国公立大入試の中心となる前期日程の志願者数は、231,450人（前年比99%）となった。国立大、公立大で分けると、国立大で前年比98%、公立大で同101%と公立大ではやや増加したが、これは前年の新設大や公立大学法人化大が新たに集計に加わったため、これらの大学を除くと国立大同様の98%となる。

後期日程では前年比98%、後期日程の廃止・縮小で募集人員も同98%となっているため、倍率に変化はみられない。なお、後期日程で2次試験を実施しない大学のなかに、ここ数年で大幅に志願者が増加した例がみられる。室蘭工業大では2次試験は調査書のみで判定されるが、志願者数は3年連続で増加しており、2020年度の483人から今春は1,434人まで増加した。

公立大で実施される中期日程は前年比101%とわずかながら志願者が増加した。ただし、中期日程の募集人員は前年比103%と増加しているため、倍率は0.4ポイントダウンした。

### ■地方では志願者減が進む

【表2】は前期日程の地区別の状況である。関東、東海、近畿など都市部では昨年より志願者が増加したものの、北海道、東北、北陸、四国、九州などでは減少した。

【表2】国公立大(前期日程) 地区別志願状況

地区	21年度	22年度	23年度	前年差	前年比
北海道	11,552	11,559	11,250	-309	97%
東北	18,381	18,560	17,620	-940	95%
北関東	11,829	11,901	12,321	+420	104%
南関東	46,734	47,118	48,272	+1,154	102%
甲信越	11,057	10,793	10,545	-248	98%
東海	21,467	20,550	20,993	+443	102%
北陸	10,873	10,903	10,253	-650	94%
近畿	39,520	40,086	40,218	+132	100%
中国	22,143	19,759	21,042	+1,283	106%
四国	10,373	11,607	9,062	-2,545	78%
九州	31,474	31,161	29,874	-1,287	96%

※文部科学省資料より

※北関東：茨城・栃木・群馬 南関東：埼玉・千葉・東京・神奈川

中国地区は昨年の志願者が前年から1割減少していたため、今年は前年比106%と増加した。この中国地区を含め、関東、近畿地区を除く各地区とも一昨年と比べ志願者は減少している。18歳人口減による志願者減少は国公立大も例外ではない。

### ■系統別の志願状況

【表3】は国公立大の前期日程の志願状況を、学部系統別に集計したものである。国公立大全体の志願者数前年比99%を基準として確認していく。文系では「文・人文」「社会・国際」で減少が目立つ。一方、「法・政治」は前年並み、「経済・経営・商」は志願者が増加した。理系では、「理」で前年並み、「農」で志願者が増加したが、「工」では減少した。医療系では「医」「歯」分野で高い増加率となった半面、「看護」では志願者が減少した。

以下に、主な系統について確認していく。なお、文中の志願者数・前年比はとくに記載がない場合、前期日程を表す。

【表3】国公立大(前期日程) 学部系統別志願状況

系統	募集人員 (A)		志願者数 (B)				志願倍率(B/A)	
	22年度	23年度	22年度	23年度	前年差	前年比	22年度	23年度
文・人文	7,166	7,162	20,680	19,061	-1,619	92%	2.9	2.7
社会・国際	4,009	4,019	12,186	11,315	-871	93%	3.0	2.8
法・政治	4,141	4,144	12,054	11,971	-83	99%	2.9	2.9
経済・経営・商	8,113	8,185	24,384	25,478	+1,094	104%	3.0	3.1
教育－教員養成課程	7,034	7,014	16,695	16,467	-228	99%	2.4	2.3
教育－総合科学課程	840	851	2,006	2,102	+96	105%	2.4	2.5
理	5,085	5,042	14,098	14,159	+61	100%	2.8	2.8
工	22,711	22,768	64,085	61,341	-2,744	96%	2.8	2.7
農	5,527	5,468	15,893	16,175	+282	102%	2.9	3.0
医・歯・薬・保健	10,810	10,738	35,895	37,006	+1,111	103%	3.3	3.4
医	3,620	3,579	15,087	15,960	+873	106%	4.2	4.5
歯	453	453	1,576	1,769	+193	112%	3.5	3.9
薬	817	814	3,120	3,141	+21	101%	3.8	3.9
看護	4,014	3,990	10,647	10,281	-366	97%	2.7	2.6
医療技術・他	1,906	1,902	5,465	5,855	+390	107%	2.9	3.1
生活科学	798	792	2,410	2,349	-61	97%	3.0	3.0
芸術・スポーツ科学	1,547	1,547	6,848	6,877	+29	100%	4.4	4.4
総合・環境・情報・人間	2,298	2,472	7,323	7,129	-194	97%	3.2	2.9
国公立 計	80,079	80,202	234,557	231,430	-3,127	99%	2.9	2.9

※河合塾調べ(大学発表の数値と文部科学省発表の数値が異なる大学は大学発表値を優先)  
 ※系統の分類は河合塾による

#### 【文・人文学系】

系統全体の志願者数は前年比92%と大きく減少した。分野別にみると、「文学」「外国語」などで減少率が高かった。とくに「日本文学」では、群馬県立女子大(文一国文)、都留文科大(文一国文)など、志願者の減少が続く大学もみられる。「外国語」では東京外国語大の志願者が前年比81%と大きく減少した。東京外国語大では共通テスト数学が1科目から2科目必須となり、数学の負担増が敬遠要因となった。このほか大阪大(外国語)でも前年比93%と志願者が減少した。

#### 【社会科学系(社会・国際、法・政治、経済・経営・商)】

「社会・国際」系も前年比93%と志願者の減少が目立つ。なかでも「国際関係」分野では前年比85%と減少率が高くなり、倍率も3.0→2.5倍へと大きくダウンした。東京外国語大(国際社会、国際日本)が共通テスト数学負担増から、前年比67%と大きく志願者を減らしたほか、前年に志願者が大きく増加していた宇都宮大(国際)、金沢大(人間社会一国際)、島根県立大(国際関係)などでも志願者が減少した。名桜大(国際)では改組と共に大規模な入学定員増があり、前期日程の募集人員は30名増加した。志願者も前年比129%と増加したが、倍率に大きな変化はなかった。

「法・政治」系では、系統全体の志願者数は前年並みだが、「法」分野で志願者減少、「政治・行政」分野の志願者は前年比 133%と大きく増加し、対照的な動向となった。大学別にみると、東北大(法)、一橋大(法)、神戸大(法)、九州大(法)など難関大の法学部で志願者が減少したところがみられた。一方、地方の大学では、今春は志願者が増加した大学が目立った。さらに近年極端な隔年現象を起こしているケースがみられ、今春までの3年間の志願者数前年比をみると、福島大(人文社会—行政政策)では110%→50%→263%、静岡大(人文社会—法)では59%→342%→22%で推移している。倍率も1倍台から3～6倍台と変動が大きく、前年低倍率の大学は翌年は注意が必要という事例になっている。

「経済・経営・商」学系では、前年比 104%と志願者が増加した。周南公立大(経済)の志願者数が今年集計に加わっている影響もあるが、これを除いても前年比は102%と文系の中では人気学系となっている。増加率が高かったのは横浜国立大(経済)前年比 272%、大阪公立大(経済)同 160%などで、横浜国立大は大学全体としても2年連続で志願者が増加している。大阪公立大(経済)は前年志願者が減少しており、その反動とみられる。名古屋市立大(経済)では入学定員増により前期・後期日程とも募集人員が増加、志願者は前期日程で前年比 119%と増加したものの、後期日程では同 89%と減少し、倍率は大きくダウンした。

### 【教育学系（教員養成課程、総合科学課程）】

教育学系全体の志願者数は前年比 99%となった。教育学系のうち総合科学課程の志願者数は前年比 105%と増加したものの、規模が小さいため教育学系全体には影響しなかった。全体では前年並みの志願者数であるが、大学ごとにみると志願者数の変動が大きな大学もみられる。宇都宮大(共同教育)、金沢大(人間社会—学校教育)、鳴門教育大では志願者が前年の6割程度まで減少、倍率も1倍台にダウンした。反対に志願者が大きく増加したのは、宮城教育大、岡山大、広島大などで、いずれも倍率は今年の1倍台から今春は2倍台に回復した。

教育系は全系統の中で最も倍率が低い。個別の募集区分でも今春は3分の1が1倍台となっており、競争緩和が進む。また、低倍率の区分は翌年志願者が集中し、隔年現象がしばしばみられる系統でもある。

### 【自然科学系（理、工、農）】

前年並みの志願者数となった「理」学系では、「数学・数理情報」「生物」分野などで志願者が増加した。大学別にみると、筑波大(理工)、東京工業大(理)、静岡大(理)、大阪公立大(理)、九州大(理)、鹿児島大(理)などで志願者が大きく増加した。鹿児島大では前年志願者が減少していたことに加え、今春より共通テスト重視型のaに加え2次重視型のbパターンを実施する。受験者はa・b両パターンで合否判定される。全プログラムで志願者が増加したが、なかでも生物学では前年から倍増した。今年共通テスト生物の平均点が物理、化学に比べ低かったことから、2次重視型のある当該大の志願者が増加したものとみる。

「工」学系では前年比 96%と志願者が減少した。旧帝大を中心とする難関大9大学では前年比 99%と前年並みの志願者数を維持しており、その他の大学で減少(前年比 94%)した。分野別では、「機械・航空」「生物工・生命工」などで志願者が増加した一方、「電気・電子」「応用化学」では減少しており、人気・不人気が分かれた。なお、「理」「工」学系では、横浜国立大(理工)の志願者数が前年から2割以上増加した。2022年度も前年から7割以上増加しており、2年連続の大幅増となった。

「農」学系では前年比 102%、昨年ほどの増加率ではないものの2年連続の志願者増となった。倍率も「理」「工」学系より高い3.0倍となっている。とくに増加率が高いのは「獣医」分野で、志願者は前年から1割増となった。なかでも鹿児島大(共同獣医)では前年の3倍近い志願者が集まった。先ほどの理学部同様、共通テスト重視のaに加え、2次重視のbパターンを実施する。受験生は配点パターンの違うa・bいずれかに出願する。倍率はaが3.3倍に対し、bは19.7倍と大きく差が開いており、2次で挽回を考える受験者が多かったとみる。

### 【医療系（医・歯・薬・保健）】

医療系全体の志願者数は、前年比 103%と増加した。今春は難関資格に関連が深い系統・分野の人気が高く、「医」「歯」「薬」で志願者が増加した。

「医」では、3年連続の志願者増となり、倍率は4.5倍に上昇した。10倍を超える高倍率の大学は、福島県立医科大(一般枠)、岐阜大、奈良県立医科大、島根大であった。なかでも岐阜大は2年連続で10倍を超えた。今春は後期日程廃止により前期の募集人員が増加したことで志願者を集めた。また、名古屋大、京都大では、第1段階選抜を基準点で行うため、昨年は志願者が大きく減っていたが、今春はいずれも志願者が増加した。

なお、医学科の志願者が増えたこともあり、前期日程における第1段階選抜不合格者数は前年の約3千人から約3千6百人に増加した。

「薬」では今春もわずかながら志願者が増加、3年連続の志願者増となった。前年志願者が増加していた金沢大、広島大などで減少した一方、前年は志願者が減少していた東北大、岡山大（薬一薬）などでは増加した。

**【その他】**

「総合・環境・情報・人間」の志願者は前年比97%と減少した。「総合」分野は前年大きく志願者が増加した反動で今春は前年比64%と大きく減少した。金沢大（融合）ではスマート創成科学類が新設されたが、募集人員が少ないこともあり志願者は集まらなかった。徳島大（総合科学）は隔年現象が著しく、3年の志願者前年比は41%→313%→26%と推移している。

「情報」分野は前年比116%と志願者が集まった。一橋大、名古屋市立大などの学部新設が要因となったほか、名古屋大（情報）、広島大（情報科学）などで志願者が増加した。

**■難関国立大の志願状況**

【表4】は旧帝大を中心とした難関10大学の志願状況を前期日程・後期日程でまとめたものである。

難関10大学全体では、前期日程の志願者数は55,662人（前年比99%）と前年並みとなった。大学別にみると、東京工業大、一橋大、京都大で志願者数が前年を上回った。以下、難関10大学の状況を個別にみていく。

**【北海道大学】**

前期日程の志願者数は前年比98%とやや減少した。学部別にみると志願者は文、経済、総合入試理系、水産学部で減少した。いずれも前年に志願者が増加していた学部である。

一方、今春志願者が増加したのは、法、獣医、医、歯学部であった。医学部では医学科で前年比92%と志願者が減少したものの、入学定員減により募集人員も減少しており、倍率は上昇した。保健学科の看護学、検査技術科学、作業療法学、放射線技術科学の各専攻では志願者が増加した。とくに作業療法学では倍率が前年の1.8倍→7.4倍に上昇した。

後期日程では、志願者が前年から1割増となった。文、教育、農、薬学部などでは2年連続の志願者増となった。なかでも農学部は2年連続で前年から2割増と大きく志願者を増やした。

**【東北大】**

前期日程の志願者数は前年比97%、2年連続の減少となった。学部別にみると、文、法、経済、理、工、医学部で志願者が減少した。とくに文学部では前年比82%と減少幅が大きく、2018年度以降、隔年現象を起しながら志願者を徐々に減らしている。また、法学部は3年連続、経済学部は2年連続の志願者減となったほか、工学部（前年比89%）は、過去20年で最少の志願者数となった。

志願者が増加した学部は教育、農、歯、薬の4学部。このうち農、薬学部は、2020年度以降隔年現象を繰り返しており、今春は増加の年にあつた。歯学部は前年まで3年連続で志願者が減少していたこともあり、今春は前年比197%と前年の2倍近い志願者が集まった。

後期日程では、経済、理学部ともに志願者が減少した。いずれも志願者は前年から2割以上減少した。

**【東京大学】**

大学全体の志願者数は前年比98%となった。文科類では、文科二類で前年並みの志願者となった。昨年、志

**【表4】国立難関10大学の志願状況**

大学名	前期日程				後期日程			
	22年度	23年度	前年差	前年比	22年度	23年度	前年差	前年比
北海道	5,409	5,284	-125	98%	4,107	4,524	+417	110%
東北	4,392	4,239	-153	97%	1,332	1,007	-325	76%
東京	9,507	9,306	-201	98%	-	-	-	-
東京工業	3,802	4,167	+365	110%	-	-	-	-
一橋	2,588	2,641	+53	102%	1,244	1,739	+495	140%
名古屋	4,339	4,258	-81	98%	38	76	+38	200%
京都	7,210	7,417	+207	103%	360	410	+50	114%
大阪	7,501	7,398	-103	99%	-	-	-	-
神戸	6,071	5,885	-186	97%	4,052	4,020	-32	99%
九州	5,143	5,067	-76	99%	2,549	2,218	-331	87%
難関10計	55,962	55,662	-300	99%	13,682	13,994	+312	102%
その他大計	178,034	175,788	-2,246	99%	149,598	146,073	-3,525	98%

※文部科学省資料より  
※「その他大計」は難関10大を除いた国公立大計

願者が大きく増加したが、その反動は見られなかった。一方、文科一類・三類では志願者が減少した。とくに三類では志願者数は募集人員の約3倍程度であったため、唯一第1段階選抜は実施されなかった。理科類では、理科一類で志願者減、二類で増となった。理、農学部が理科二類の人気につながっている。理科三類は前年並みの志願者数となった。しかし、第1段階選抜の予告倍率が3.5倍から3.0倍に狭まっており、第1段階選抜の合格者数は昨年の340人から291人に大きく減少した。

### 【東京工業大学】

大学全体の志願者数は前年比110%と大きく増加、4年ぶりに4千人を超えた。学院別にみると、物質理工学院を除く5学院で前年を上回る志願者が集まった。なかでも、理、工学院で志願者は100人以上増加した。東京医科歯科大との統合、次年度からの総合型・学校推薦型選抜での女子枠の導入など、昨秋以降、話題にあがるが多かったことも受験生の注目を集めるきっかけとなっただろう。

倍率をみると、情報理工学院が9.9倍と例年通り最も高くなった。次いで理、工、環境・社会理工学院と前年入試から序列に変化はなかった。全学院をあわせて募集人員の4倍を上回る志願者数となったため、2段階選抜が実施された。

### 【一橋大学】

前期日程の志願者数は前年比102%とやや増加した。新設するソーシャル・データサイエンス学部を除いた既存の学部だけでみると、志願者は前年比95%と減少したものの、学部新設による既存学部の募集人員の減少率と同率であり、定員減の影響はみられなかった。学部別の状況を見ると社会、経済学部で志願者が増加した一方、法、商学部で減少した。社会学部は2年連続の志願者増となった。ソーシャル・データサイエンス学部には182人の志願者が集まり、倍率は6.1倍と学内で最も高くなった。

後期日程は経済、ソーシャル・データサイエンスの2学部で実施される。経済学部では志願者数は1,095人（前年比88%）と前年から1割以上減少したものの、ソーシャル・データサイエンス学部には644人の志願者が集まった。

### 【名古屋大学】

前期日程の志願者数は前年比98%、ここ10年で最少の志願者数となった。学部別にみると、経済学部で前年比75%となったのをはじめ、文学部（同92%）、教育学部（同93%）など文系で減少率が高い学部が目立った。一方、農、医、情報の3学部では志願者が増加、なかでも医、情報学部はいずれも前年から2割増となった。医学科では前年比167%と、とりわけ増加率が高かった。第1段階選抜の基準点が昨年の700/900点から600/900点に引き下げられたことに加え、共通テストの平均点アップにともない、前年に半減していた志願者が戻ってきた形だ。なお、今春より地域枠は前期日程で募集する。倍率は一般枠2.7倍、地域枠4.6倍となった。看護学専攻は医学部の中で唯一志願者が減少した。今春は愛知県立大で2次科目減、名古屋市立大で入学定員増と周辺大に志願者増加要因があったことが影響した。情報学部の志願者増は、前年志願者が大幅に減少した反動もあるだろう。3学科とも志願者が増加したが、なかでもコンピュータ科学科は前年比143%と増加率が高くなった。

後期日程は医学科のみ実施する。志願者は昨年の38人から76人へ倍増した。今春、地域枠が前期日程に移ったため、後期日程は一般枠となった。旧帝大で唯一、後期日程を実施する医学科であることから、高成績層が集まったことが予想される。

### 【京都大学】

前期日程の志願者数は103%と増加した。9年ぶりに増加に転じた前年に続く志願者増となった。学部別にみると、経済、理、医学部では志願者はいずれも前年から1割以上増加した。経済学部では前年まで2年連続で志願者が減少していたことに加え、系統人気も要因となった。理学部、医学部医学科は第1段階選抜を基準点で実施しており、昨年は共通テストの平均点ダウンの影響で志願者が大きく減少していた。今年の志願者増はその反動もあるだろう。

志願者が減少したのは、文、教育、法、工、薬学部だが、いずれも減少数は小幅にとどまっている。工学部の各学科の倍率をみると、情報学科が4.7倍と最も高く、次いで建築（3.7倍）、物理工（3.3倍）などが続く。最も低いのは工業化学科（1.3倍）である点も例年と変化ない。

法学部の後期日程で実施される特色入試には、410人（前年比114%）の志願者が集まった。例年、東京大、京都大の前期日程との併願者が大部分を占めており、志願者増で厳しい入試が見込まれる。

## 【大阪大学】

大学全体の志願者数は前年比 99%となった。学部別にみると、文、法、基礎工、薬学部で志願者が増加した。文学部は昨年の志願者数とその前年から1割減となっており、今春は一昨年並みの数に戻った。基礎工学部では志願者が前年比 130%と大きく増加した。基礎工学部と工学部は 2019 年度から隔年現象を起こしており、今年は基礎工学部で志願者増、工学部で志願者減（前年比 93%）となった。

志願者が減少したのは、外国語、理、工、医、歯、人間科学部などである。外国語学部では、一部の専攻で1倍台の低倍率になっている。なかでもインドネシア語専攻は1.0倍となった。医学部では検査技術科学専攻を除き志願者減となった。医学科は前年から1割減となった。ただし、入学定員減で募集人員も減少したため、倍率に大きな変化はない。歯学部は全国的には人気となっているが、大阪大では今春は1割減となった。

## 【神戸大学】

前期日程の志願者数は前年比 97%と減少した。2年連続の志願者減である。学部別にみると、文、法、理、農学部などで志願者が減少した。文学部では近年隔年現象を起こしており、直近4年の志願者前年比は121%→70%→158%→67%で推移しており、今春の倍率は2.2倍となった。理学部では5年ぶりの志願者減となった。生物学科では志願者が増加したものの、他の4学科はいずれも減少した。農学部では前年比 85%と志願者が大きく減少した。前年まで志願者は2年連続で1割以上増加しており、それが影響したようだ。

志願者が増加したのは、経済、経営の2学部のみであった。経済学部では前年比 120%と大きく増加した。志願者数が8百人を超えたのは4年ぶりとなる。増加したのは「総合選抜」で、「数学選抜」「英数選抜」は志願者が減少した。

後期日程の志願者数は前年比 99%となった。法、理、海洋政策科学、医学部などで志願者増となった。法学部では前年比 124%と志願者が大きく増加した。工学部では前年並みの志願者数であったが、建築、電気電子工学科などで志願者が増加した。電気電子工学科は今春、募集人員が18名→26名に増加しており、3年連続の志願者増につながった。

## 【九州大学】

前期日程の志願者数は前年比 99%となった。志願者が増加したのは、理、薬学部などである。薬学部では臨床薬学科で志願者が増加、倍率は3.8倍に上昇し、創薬科学科（2.5倍）との差が広がった。志願者が減少したのは、文系4学部、共創、農学部などである。文系4学部の志願者数は前年比 93%と大きく減少した。農学部は前年に志願者が大きく増加していたことが影響した。

後期日程では、前年比 87%と志願者が減少した。学部別には農、薬学部で志願者が増加したものの、その他の学部では減少した。とくに減少率が高いのは経済学部で、経済・経営学科では前年比 41%と大きく志願者が減少した。一方の経済工学科は志願者が増加しており、今年は2学科の倍率はほとんど差がなくなった。

大学別の国公立大の出願状況は河合塾入試情報サイト Kei-Net (※) にて閲覧が可能となっているのでご利用いただきたい。

※Kei-Net 国公立大出願状況：<https://www.keinet.ne.jp/exam/entry/index.html>